

細気管支の発芽現象に対する病理組織学的研究

著者	杉山 健二郎
号	721
発行年	1971
URL	http://hdl.handle.net/10097/18983

氏 名 (本 籍) ^{すぎ}杉 ^{やま}山 ^{けん}健 ^じ二 ^{ろう}郎

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 7 2 1 号

学位授与年月日 昭 和 4 6 年 1 2 月 8 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

最 終 学 歴 昭 和 3 3 年 3 月
岩手医科大学卒業

学 位 論 文 題 目 細気管支の発芽現象に対する病理組織学的研究

(主 査)

論文審査委員 教授 黒 羽 武 教授 笹 野 伸 昭

教授 斉 藤 達 雄

教授 諏 訪 紀 夫

論文内容要旨

気管支炎と肺気腫の関係は熟知されているが、病理学的には気管支炎と関係の無い肺気腫も実在する。著者は気管支狭窄を見なかつた囊肺症をしらべたが、外傷死による少女の肺で中葉だけに限局した肺気腫を見た例や、内臓転錯症を示した婦人の肺気腫は、気管支肺胞系の發育異常を考えざるを得なかつた。

老人性肺気腫で細気管支から小さなブラが膨出する所見や、小気管支の筋層から上皮囊が膨出する所見のあつた老人性肺炎の例は、細気管支の発芽症を思わせるものであつた。

また肺炎部の細気管支癌に肺炎を合併して死亡した例では、肺臓の全葉に辺縁性のブラが多発しており、之らを検鏡しているうちに、気管支壁から、生長円錐体（植物学の術語）とも云うべき上皮囊が突出してブラ形式の端緒をなす事実を見た。

かような経験のあと、31才男子の肺尖部に偶発的のブラを見た剖検肺をしらべたところ、その基底部に色んな段階の発芽像を発見し、生長円錐体の発生が成人肺の肋膜直下で起れば、その求頂的の發育（植物学用語）によつて肺膜を穿孔し、封裂包（ブレブ）が形成されるものと推理した。

この限局性ブラの外観が、鳥類肺の気囊に酷似することから、著者は孵化鶏肺について気囊の發生過程を観察し、細気管支の気囊化生という新概念に到達した。

以上の所見を総合すると、人体の細気管支は生後にも発芽して肺胞を新生しようとする努力を示すもので、目的を達しなければ、鳥類気囊の模造物に終ることになる。上記の症例には、かような発芽傾向が腫瘍化に変じているものもあつた。

この細気管支の気囊化生は、従来用いられた腺様化生を補充する用語である。なお著者はシーバート氏らの細気管支性肺気腫という名称が、誤解され易い点を懸念し、之を細気管支性囊肺症に改めることを提案した。

審 査 結 果 の 要 旨

肺の末梢区域に発生する薄壁性の含気性納包には色々な名称があり、肺気腫の産物として肋膜に亀裂が生じ、肋膜結合織内に間質性気腫が起るとブレブ（封裂包）と呼んだり、肺気腫のために多数の肺胞が破綻して合同性の気腔を生じた場合にはブラ（風羅）と呼ぶことが常識になっている。或は気管支炎のために分泌物が停滞して細小気管支に弁状機転が起ると、その末梢区域には一方通行的な空気の送入現象が生ずるので、肺胞の過膨張の結果、上の様な納包形成の端緒をなすという。之は合理的な説明であるけれども、気管支炎と関係の無い場合にも、同様な納包形成は見られることがあるので、別な観点からの究明も必要となる。

著者は老人性肺炎の際に小気管支の筋層を突破して、ポリ-ブ状に上皮細胞索が周辺に突出する所見を注目し、之が場処によっては含気性の肺腺腫にまで発展する事実を認め、人体の細気管支は生後にも發育して肺胞を新生する努力を示す潜能があることを推理した。

解剖学における気管支樹幹（ブロンキアルツリー）という名称の根源は、植物との類似性から出ているので、発芽の形態が人体の細気管支壁に見られるものと似ていることから、生長円錐体という術語を起用するに至った。なお、発生学的に鳥類の気嚢は、人体の肺納包（ブレブ、ブラ）とその発生過程が酷似することを観察して、人体病変の場合には細気管支の気嚢化生があり得ることを論じた。

著者の研究によれば、ハイエック氏が正常の気管支に見るという生理的の憩室は、気管支樹幹に発生する側芽、休止芽、潜伏芽などに相当するのである。

上記の成果は、未だ何れの成書にも記載されない新知見であって、病理学的に甚だ興味ある観察というべく、学位授与に値する業績と判定する。